

赤崎地区公民館だより

12月号



公民館HP

# あかさき

題字 山基洞宗



## 歳時記



### ● 二十四節気：小雪 しょうせつ 11月22日～12月6日頃

雪が降り始めるころ。お歳暮の準備をする期間。

- ❄️ 11月22日～11月26日頃 虹蔵不見 (にじかくれてみえず)  
曇り空が多くなる頃。陽射しが弱まり、虹を見ることが少なくなる。
- ❄️ 11月27日～12月1日頃頃 朔風払葉 (きたかぜこのはをはらう)  
冷たい北風が、木々の葉を落とす頃。朔風とは北風のこと。
- ❄️ 12月2日～12月6日頃 橘始黄 (たちばなはじめてきばむ)  
日本に古くからある柑橘類の橘の実が黄色くなる頃。



### ● 二十四節気：大雪 たいせつ 12月7日～12月21日頃

本格的な冬の到来。新しい年への準備「正月事始め」の時期。

- ❄️ 12月7日～12月10日頃 閉塞成冬 (そらさむくふゆとなる)  
全てが閉じられたような冬の訪れ。塞ぐには人々を守るという意味もある。
- ❄️ 12月11日～12月15日頃 熊蟄穴 (くまあなにこもる)  
熊が冬ごもりの時期に入り、穴にこもる頃。しまりすや蛙も冬籠。
- ❄️ 12月16日～12月20日頃 鰻魚群 (さけのうおむらがる)  
海で育った鮭が、産卵のために自分の生まれた川へと里帰りをする頃。



暦生活HP

## ▶ 11月2日～4日 町民文化祭 子供達の造形



みやがい はるき



3年<sup>4</sup> みやがいせい



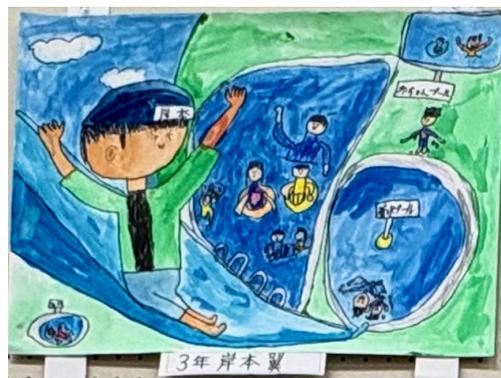
みやがい りゅうせい



6年 29 宮階ひなた



子供の頃の造形は  
おもしろくて、美しい  
大人になったら、造れない



3年 岸本翼



## 野良素人のつぶやき



## ▶ 効率化した近代農法の忘れ物

本年4月13日から10月13日まで、関西万博が開催されました。55年前、1970年に大阪で開かれた万国博覧会のテーマは「人類の進歩と調和」でした。当時の博覧会は、技術文明の発展を示すだけでなく、その裏側で自然や人間性が損なわれていく“ひずみ”にも目を向け、**どうすれば進歩と調和を両立できるか**を考える場でもありました。

「進歩」という言葉には明るい響きがあります。これまでより良くなる期待を抱かせ、あまり悪い面を感じさせません。しかし私たちはときに「新しいものへ進むこと＝古いものを捨てること」と勘違いしてしまうことがあります。

たとえば、電化製品を買って保証期間が過ぎると、ちょうどその頃に故障した経験はないでしょうか。企業にとって保証期間内の故障が多いと負担が大きくなるため、ある程度の耐久性は確保されています。一方で、あまり長く持ちすぎると次の製品が売れないので、設計の段階で“ほどよい寿命”が意識されています。ソフトウェアには契約期間があり、期限が切れると使えなくなるものもあります。所有しているはずなのに、どこか“**レンタル機器**”のようです。なのに処分費用がかかるのでそれよりも不利な状況です。

## ▶ ここから農業の話に移りましょう

産業革命以前の農業では、**輪作と家畜の糞を使った堆肥**が土地を豊かにする基本でした。レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は、こう書き残しています。

## 「私たちは足元の土より、頭上の星のほうをよく知っている」

この言葉は確認された本人記録ではなく、伝承として知られるものです。人類は宇宙を深く研究してきた一方で、土壌や地中の理解は不十分で、土は農業や環境に不可欠なのに軽視されがちで、身近なものほど理解が浅い、という気づきを与えます。

19世紀に入ると、土が痩せた土地でも収量を増やす**化学肥料**が登場します。これにより、「土は化学製品を入れておく容器のようなもの」という考え方が広がりました。さらに農業の**機械化**が進むと、土は安くて価値の低い“**工業的な資材**”として扱われるようになります。確かに、動力や化学肥料の普及で作業効率は大きく向上し、少人数でも広い農地を管理できるようになりました。これ自体は大きな進歩と考えられました。しかしその裏で、多くの農民は“**土がどのように変化しているか**”に目を向けなくなりました。そして、産業革命以前から行われていた**土壌微生物の力を活かす農法**は、次第に忘れられていったのです。

## ▶ 私たちの意識の変化について

産業革命以降、私たちは「耕して、肥料をまき、草を刈らなければ作物は育たない」と考えるようになりました。でも、よく考えると**森や林の植物には、肥料も耕すこともしません**。その理由はともかく、多くの人がこの“違い”は知っていたわけです。そこに疑問を抱いたのが、「**奇跡のリンゴ**」で知られる**木村秋則さん**です。彼は11年もの試行錯誤の末、**農薬・肥料・除草剤を一切使わないリンゴ栽培**に成功しました。1988年のことです。

さらに時代は前後しますが、**福岡正信**（1913-2008）も同じように自然の仕組みを重視しました。彼は「わら一本の革命」で、**耕さない・肥料を使わない・農薬を使わない・除草もしない**という**自然農法**を提唱しました。こうした人々は、機械化による省力化が、**本当の意味での農業の進歩ではないのではないか**と感じていたのだと思います。

先月号で著者HPから「土壌三部作」を紹介しています。その一つに「**土・牛・微生物**」があります。その中では特に土壌の健康を維持する重要性を強調しています。土は作物の質に大きく関わるためです。

## &lt;土壌劣化を防ぐための三つの原則&gt;

1. 土をできるだけ乱さないこと
2. 被覆作物や作物残渣で、土を常に覆うこと
3. 多様な作物を輪作すること

<https://tinyurl.com/476d5z9u>

『**土・牛・微生物**』デイビッド・モンゴメリー著(2017年)は、特定の農法が過去の土壌劣化をいかに逆転させるかを扱っています。土壌の健康

を回復させようとしている世界中の農家を紹介し、慣行農法と有機農法に関するありがたい議論を排し、農業が環境問題の解決策となるという刺激的なビジョンを描いています。



### 野良素人のつぶやき



### ▶ 効率化した近代農法の忘れ物

著者は、単に不耕起にするだけでは不十分だと言います。被覆植物（グリーンカバー）やマルチを使ってもまだ足りず、**多様な作物を育てて、さまざまな土壌微生物が生きられる環境をつくる**ことが欠かせないと述べています。さらに、これらの三原則を踏まえつつ、**地域の土壌や気候、農場ごとの個性に合った農法を開発していく必要がある**とも指摘しています。

### ▷ 慣行農法・有機農法どちらにも効果はある

土壌の健康を高める取り組みは、**有機農法**では生産性を高め、残留農薬を減らし、ファイトケミカルや抗酸化物質、微量栄養素の濃度を高め、**慣行農法**でも肥料や農薬の投入を減らすことで、土壌侵食や水保持力、硝酸塩・リン酸塩・農薬による汚染などの問題改善に役立つとされています。

ただし、化学肥料や農薬は、植物と土壌生物の互いに助け合う関係を弱め、**土壌の健康を損なうことがあるため、使用量には注意が必要です**。土壌の健康が万能というわけではありませんが、**慣行農業を見直し、再生可能な農法へ転換した農家が少ない労力とコストでより良い収穫を得られる例が増えています**。こうした実例が広がることで、この賢いやり方はますます注目されていくでしょう。

石油資源はいずれ枯渇すると言われていています。いつとは断言できませんが、石油を原料とした製品は手に入りにくくなり、価格が上がっていくでしょう。その時まで慣行農法を続けるのか、それとも**土壌生物の働きを生かし、有機物が循環する仕組みを軸にした農と社会を目指すのか**。私たちは選択を迫られています。

コンポストを使った経験がある方ならお気づきかもしれませんが、家庭の「燃えるゴミ」には、本来なら自然の循環に戻せる有機物がたくさん含まれています。これらを別に分けてみると、家庭から出るゴミが驚くほど少なくなることがわかります。今年、夏野菜を育てる際にこのコンポストを使ってみたところ、**きゅうりがコンポストだけでとてもよく育った**ことに私自身驚きました。

### ▷ 気候変動と土壌の役割

今年は、農家にとって気候変動の影響を実感する年だったのではないのでしょうか。気候変動の原因の一つである“大気中の二酸化炭素の増加”は、植物と土の働きを考える上でも重要です。

植物は光合成によって、二酸化炭素と水から**糖（デンプン）と酸素**をつくります。つくられた糖の一部は植物体をつくる材料になり、また一部は**根の周りの微生物（特に菌根菌）に分け与えられます**。菌根菌はその代わりに、土の中からリンや窒素を吸収して植物に渡します。

こうしたやり取りの結果、炭素は植物の体だけでなく、**土壌にも有機物（＝土壌炭素）として蓄積し、土をより肥沃にします**。植物を伐採して燃やせば元に戻るように思えますが、土壌炭素は簡単には分解されず、**炭素を蓄える“貯蔵庫”として役に立つ**のです。そのため、**有機物が豊富な土を育てることがとても大切**になりますが、逆に化学肥料に頼りすぎると、植物は菌根菌に糖を与える必要がなくなり、結果として土壌の肥沃化が進みにくくなります。

古いことわざに、「**上農は草を見ずして草をとり、中農は草を見て草をとり、下農は草を見て草をとらず**」というものがあります。単純に読むと「草を取らない下農＝循環型農業」に思えるかもしれませんが。しかし実際には、土壌の健康を守るためには、**土を乱さない・土を常に覆う・多様な作物を育てるというく土壌劣化を防ぐ三つの原則**をていねいに実践する必要があります。むしろ、この原則をきちんと行うほど、循環型農業の効果が発揮されるのだと思います。今年の経験を通じて、**私自身もよりしっかりと三つの原則を実践してみたい**と感じました。

## 本の紹介



<https://www.sogensha.co.jp/book/b10138054.html>

